
僕らはただ、不器用なだけだった

隼人・K

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕らはただ、不器用なだけだった

【Nコード】

N1886C

【作者名】

隼人・K

【あらすじ】

クリスマス。楽しく過ごすはずだったのに、彼女が何故か不機嫌で。

空には分厚い雲がかかっている。そんな中、僕は校門の前で寂しく佇んでいた。二日前から冬休みに入った中学校は、宿直の先生を除いて誰もいないはずだ。

寒い。コートに手袋、帽子まで装備しているのに、所々に隙間があるのか冷気が体を包んでいく。マフラーをしてくればよかったなと何気なく思い、そんなことをしたら半殺しにされるだろうなどと、長くため息をついた。

クリスマスにはマフラーをあげるから、何も巻いてこないでね。

美沙は笑顔でそう言って、さらに付け加えた。これはお願いじゃなくて命令よ、と。

「命令」だということは破れば罰則があり、今までのケースからいってその罰則は例外なく「半殺し」になるだろう。

もう一度ため息をつく。何度も何度も深く浅く。今のうちにしておかなければ、美沙と二人でいる時にいつ口から漏れてしまうかわからない。彼女と行動を共にするのはすごく疲れることだった。

しかしながら、付き合って十ヶ月を迎えるあたり心底惚れているのだと思う。何処が好きなんだと訊かれれば、返答に困ってしまうのだけだ。

腕時計に目をやる。まだ待ち合わせの時間には十分ぐらいあった。もし美沙が待ち合わせに早くやってくる女の子だったらなあ、通算十六回目の淡い希望を抱き、それが例のごとく儚げに散ったとき、遠くから僕の名前を呼ぶ声がした。

少し低めのソプラノが飛んできた方向に顔を向けると、美沙が小走りで見えてくるのが見えた。彼女と僕の距離は少しずつ縮まっ

ていき、もう歩いてくればいいのかという位置でも彼女は小走りだった。

「待った？ ごめんね、いつもより早く来たんだけど」

美沙は肩で息をしながら、左手で前髪を整える。右手には紙袋を持っていた。

「いや、待つてないよ。それよりさ、何か変わった？」

学校で会ったときは肩ぐらいいにかかっていた髪の毛が、綺麗になくなっていく。自慢そうにしていた髪を切るなんて、美沙の行動にしては意外に思えた。

「冬だから寒いとは思ったんだけど、なんだか切りたくなっちゃって」

そう言っつて首筋をさする彼女は……、なんとというか可愛かった。しばらく彼女に返答できないでいた。僕は見惚れてるのを悟られないように、そつと視線を外し代わりに紙袋へ向ける。首筋といえば、僕の首はこの紙袋に入っているであろうマフラーを巻かれるために、ずつと寒さを我慢しているんじゃないか？

わざとらしく咳払いをして、彼女の視線を手元に向けさせる。彼女はちゃんと気付いてくれ（この勘の良さも珍しいけど）、僕に紙袋を持たせると中から白いマフラーを取り出し始めた。

白い。なんだか雪の白さのようだ。いや、それ以上に、

……長いな。

何度も何度も手繰り寄せるうちに、彼女の二の腕にはマフラーが山のように積もっていく。

「ねえ」

「なに？」

僕が目で「まだあるの？」と訴えかけると、「文句あるの？」と同じく目で反訴された。

ようやく取り出し終わると、美沙は僕の首にぐるぐると巻き始めた。長いから巻き数によつては窒息してしまうんじゃないかと思つたが、何てことはない、彼女は自分の首にも巻いているんじゃないか。

二人分の巻いた回数数は数えていないけれど美沙の手が止まったとき、僕はぎよっとしてしまった。お互いの首から出ているマフラーは地面に着きそうだったのだ。

「あのさ、これの長さって……」

「よく測ってないけど、四、五メートルくらいはあるんじゃないかな」

開いた口が塞がらないというのはこのことだろう。美沙は特に不思議とは思わないらしく、逆に僕の反応に対して不満を覚えたようだった。

彼女は肩で風を切って歩き出す。僕もそれに従う。従わなければ文字通り首を絞められることになる。

一体全体、美沙のどういったところをどういった経緯で好きになってしまったのだろうか。仕草の一つ一つが僕の胸を高鳴らせていることには違いないが、それだけではあまりにも代償が大きすぎる。

歩き始めてしばらくすると、僕ら中学生の御用達である大型ショッピングモールが見えてきた。つい最近できたから客の出入りはいいものの、地元ではない人は隣町からバスで来なければいけないという不便さと、地元の人口が少ないということからすぐに廃れてしまっただろう。

定例行事みたいなものだ、デート場所がこのモールになるのは。だから、いつも通りに買い物もしない宝石を少し離れた場所から二人して眺めて、洋服を手にとったり（これも買わないけれど）、お昼時になればフードコーナーでクレープを注文した。マフラーをほどこうとはしなかったので、向かい合わずに同じ側に座る。

今日がクリスマスとは思えないほど、なんだかいつも通りだった。しかし、何かを忘れているような……。

それが何かは思い出せないけれど、忘れてはいけないことだと覚えていた。喉まで出掛かっていて、あと少しあと少しということとこゝろで戻ってしまう。僕はクレープを食べる手を止め、唸りながら努

力をした。

「ねえ、さつきから何でそんな難しい顔してるの？」

はっとなつて顔を上げてみると、美沙がため息をつきながら僕を睨みつけていた。僕は咄嗟に言い訳を考え始めたが、それも虚しく喉までしか出てこない。

お構いなしに彼女はまくしたててくる。

「難しい顔どころか、つまんなさそーに見えるよ。あたしと一緒にいるのがそんなに嫌？」

「いや、そんなことはないけどさ……」

「けど？ けど何？」

「あ、いや、ただ何となくつけたただけで、深い意味はないって」

僕は額の汗をぬぐった。やっぱり、今日の美沙はおかしい。いつもならずぐに不貞腐れて、言い返すどころか平手打ちが飛んできて、気がつくと僕だけその場に残されているはずだった。

美沙は相変わらず睨んでいる。目を合わせるのが怖かったので、仕方なくクレープを口に運んだ。歯応えのないバナナがやけに不味く思えた。前に来たときはこんな味ではなかったのに、と関係のないことのため息をつく。

美沙はそれを見逃さなかったらしい。彼女は、僕の首につながっているマフラーを両手でぐいと引っ張った。急に狭まる食道に、流動食のようなバナナがつまりそうになる。僕はむせた。それはもう必死に。

「退屈？ なんてため息なんかつくのよ。ねえ、嫌ならはつきり言っつてば……」

僕は引っ張られた分を引っ張り戻してから、いい加減にしるよ、と叫びそうになった。いつ嫌だなんて言っただよ、と、舌の上まで来ていた言葉をなんとか押しとどめる。

驚いたことに、彼女は目に涙をいっぱい溜めていた。瞬きをする和一筋二筋、頬を伝っていく。何かを言いたそうだったけど、彼女は我慢、いや言葉が見つからないという感じで目を瞑った。

美沙は勝ち気な女子だった。口論をした場合、並大抵の男子なんかでは相手にならないのだ。ドラマとかでよく見かける「言葉に詰まって泣いてしまう女の子」ではなかっただけに、美沙の泣き顔は、僕の心臓をぎゅっとなんとんで離さなかった。正直、美沙の涙は初めてみるものだった。

「なんで泣くんだよ。なあ、美沙？ 嫌なんて言っていないだろ」

美沙は、だつて、と小さく呟いた。店内にかかっている曲が変わる。一昔前に流行ったポップスが微妙にアレンジされて流れてきた。「この前さ、亜美のこと可愛い可愛いって言ってたじゃん」

聞かれていたのかと思うよりも早く、「そんなことを気にしてたのか」と口にしてた。

美沙が睨んできたが、さつきよりも迫力はなく僕は彼女の視線を真正面から受け止めることができた。

「短い髪の子のほうが好きなんでしょ？ 運動できるみたいない感じだよ」

「あのなあ、好みじゃん。そんなんで、好きとか嫌いとかにはならないっしょ」

彼女は、だつて、と口を噤んだ。

「まさか、さつきから怒ってるのってそれが原因？」

僕が呆れた調子で言うと、美沙は勢いよく立ち上がった。当然、僕の首も斜めに傾く。

「他の女子のことは可愛いとか言ってるさ、あたしと二人でいるときは無口になったり、ため息ついたり。おまけにマフラーをプレゼントしたのに何も言わないし。怒るなって言うほうが無理に決まっているでしょ」

美沙は叫びこそしなかったが、他の客を驚かせるには十分だった。何人かは僕たちを見ている。というか、椅子から微妙に浮いて、首を傾けて女の子に言われっ放しの僕を見ている。

プレゼント？ ……プレ、ああ、そうか。僕はもらっているだけで美沙に何もあげていないんだった。

僕は彼女を座らせて、謝った。

「美沙へのプレゼント渡してなかったな。それも怒っていた理由の一つだって気付くの遅すぎた、ごめん」

美沙は目を白黒させながら聞いていたが、何度か瞬きしたあと急に吹きだした。

「いや、プレゼントもらつてないから不機嫌だったわけじゃないよ。意味わかんないし、ほんとウケる。あたしそこまで強欲じゃないし」「じゃあ、何でマフラーもどうとか言ったの？」

僕はなんだかやるせなくなつて、だけど聞かないわけにはいかなかった。

彼女はお腹を抱えて一頻り笑ったあと、「問題です。誰かに物をもらつたときは？」と人差し指を立てた。僕は帽子越しに頭を掻いた。ええと、物をもらつたら、

「……ありがとう」

「正解。ね、言っていないでしょ、校門からここまでずっと」

僕は口を開けっぱなしにして、間抜けながら納得した。そうか、そういうことか。

「ありがとう」

と、今度はしっかり気持ちをこめて言う。

「それでよし」

彼女は元気よく笑った。

クレープを食べ終えた僕らは、しばらくモール内を散策して結局、買い物はせずに帰ることにした。僕と美沙の距離は前より縮まったし、クリスマスのような特別な日でなくても、きつと一つ一つが特別になるはずだと思つたからだ。だから、クリスマスはただぶらぶら歩いているだけでもいいんだ、と。

まあ、思つただけで彼女には口にしていない。そんな台詞は僕に似合わないだろうし、口にすると次のデートから変に気負つてしまつと直感がそう言っていた。

「ねえ、マフラーを渡す前さ、なんかぎこちなくなかった？」

自転車で上るにはけっこう辛い坂を歩いて下っている途中、美沙は伸びをしながら聞いてきた。

僕が立ち止まると、そのまま進んだ彼女は後ろ手に紙袋を持ち、高低差から僕を見上げるようにもう一度「ねえ」と言った。マフラーを伝って言葉が上ってくるみたいだった。

「言わなきゃ駄目？」

彼女は黙って頷いた。

「美沙さ、髪を切りたくなっただんだけって言ったじゃん？ そのときの仕草にさ、見惚れてたんだよ」

彼女は黙ったままだった。僕は思ったことを正直に言った。

「すっげー、可愛いなあって」

美沙はいつかのごとくマフラーをぐいと引つ張った。僕はバランスをどうにか保ち、美沙の力が弱まるまで歩いた（といっても、二、三步だったけど）。

「馬鹿」

一言そう呟いた美沙の頭にそっと手を乗せて、お互い様だろ、と僕も負けずに呟いてやった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1886c/>

僕らはただ、不器用なだけだった

2010年10月8日15時33分発行